



シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン ヴィジュアル／科学コミュニケーションの領域から

日時 2010年3月12日(金) 16:00～18:00 場所 芝蘭会館 山内ホール
共催 キャリアサポートセンター、女性研究者養成システム改革推進委員会
みなさまの参加をお待ちしております。

講演 1)

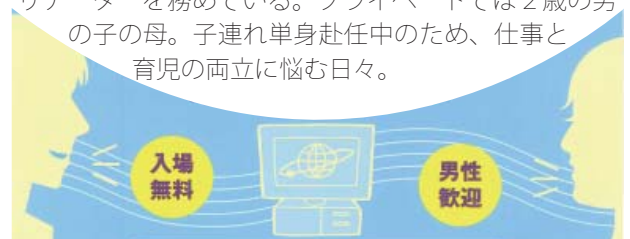
土佐 尚子 (京都大学学術メディアセンター教授)
「カルチュラル・コンピューティング」——文化・無意識・ソフトウェアの創造力——

メディア・アーティスト、研究者。http://www.tosa.media.kyoto-u.ac.jp/ 高校生の頃から芸術家を目指し、シュールレアリズム(心、無意識などの見えないものの可視化)に興味を抱く。それをコンピュータを用いて実現するために工学の道に進み、博士号を取得。研究テーマは、感情、記憶、意識といった文化情報を扱うコミュニケーションの可視化表現。武蔵野美術大学講師、ATR 知能通信研究所研究員、JST 相互作用と賢さ領域研究員、マサチューセッツ工科大学建築学部 Center for Advanced Visual Studies フェローアーティストなどを経て現職。アメリカでの研究活動をきっかけにして、日本文化の精神をコンピュータで可視化することに取り組み、「カルチュラル・コンピューティング」という領域を開拓。京都大学オープンコースウェア編集長を務める。
http://ocw.kyoto-u.ac.jp/

講演 2)

八木 絵香 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師)
科学技術コミュニケーションという道——研究者として、実践者として、1人の子供の母として——

修士課程修了後シンクタンクで就職。1999年のJCO臨界事故を契機に、科学技術(がもたらすリスク)を社会としてどう引き受けるかについての「コミュニケーション」や「社会的合意形成」に興味を持ち、社会人ドクターに。学位取得後、現職。専門家と非専門家、もしくは異なる利害や意見を持つ人同士、または素人同士が科学技術の問題について議論する場を多数企画し、ファシリテーターを務めている。プライベートでは2歳の男の子の母。子連れ単身赴任中のため、仕事と育児の両立に悩む日々。



京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」表彰式と研究発表

**2009年度
京都大学優秀女性研究者賞
「たちばな賞」表彰式**
〈受賞者による研究発表〉

2009年度 京都大学優秀女性研究者賞
「たちばな賞」受賞者

学生部門 渡邊 皓子 (理学研究科・博士後期課程)
「黒点暗部微細構造に関する観測的研究」

研究者部門 アスリ チョルパン (経営管理研究部・寄附講座准教授)
「『ビジネス・グループ』に関する理論的、実証的国際比較研究」

◆日時: 2010年3月3日(水) 13:00～14:35
◆場所: 京大会館 101号室

プログラム

13:00-13:10	開会の挨拶	大西 珠枝 (京大副学長)
13:10-13:25	表彰式	吉川 潔 (京大副学長)
13:25-13:55	研究発表1	渡邊 皓子
13:55-14:25	研究発表2	アスリ チョルパン
14:25-14:35	閉会の挨拶	稲葉 カヨ (女性研究者支援センター長)

多数のご参加をお待ちしております。

会場は、京大1号館101号室より、京大1号館102号室に移ります。
発表の場へは、変更によるご迷惑をお詫言います。

◆お問い合わせ先: 京都大学女性研究者支援センター
TEL: 075-753-3827 E-MAIL: tachibana@wrc.kyoto-u.ac.jp

京都大学は、本学における若手の女性研究者の優れた成果を讃える制度として、平成20年度に「京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)」を創設しました。このたび、第2回京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)の受賞者を、学生部門と研究者部門1名ずつ決定しました。

<受賞者>

学生部門 渡邊 皓子 (理学研究科博士後期課程)
研究者部門 アスリ チョルパン (経営管理研究部・寄附講座准教授)

<表彰式および研究発表>

日時: 2010年3月3日(水) 13:00～14:35

場所: 京大会館 101号室

プログラム:

13時00分～13時10分 開会の挨拶 (大西珠枝 理事・副学長)

13時10分～13時25分 表彰式 (吉川潔 理事・副学長)

13時25分～13時55分 研究発表1 (渡邊皓子)

黒点暗部微細構造に関する観測的研究

13時55分～14時25分 研究発表2 (アスリ チョルパン)

「ビジネス・グループ」に関する理論的、実証的国際比較研究

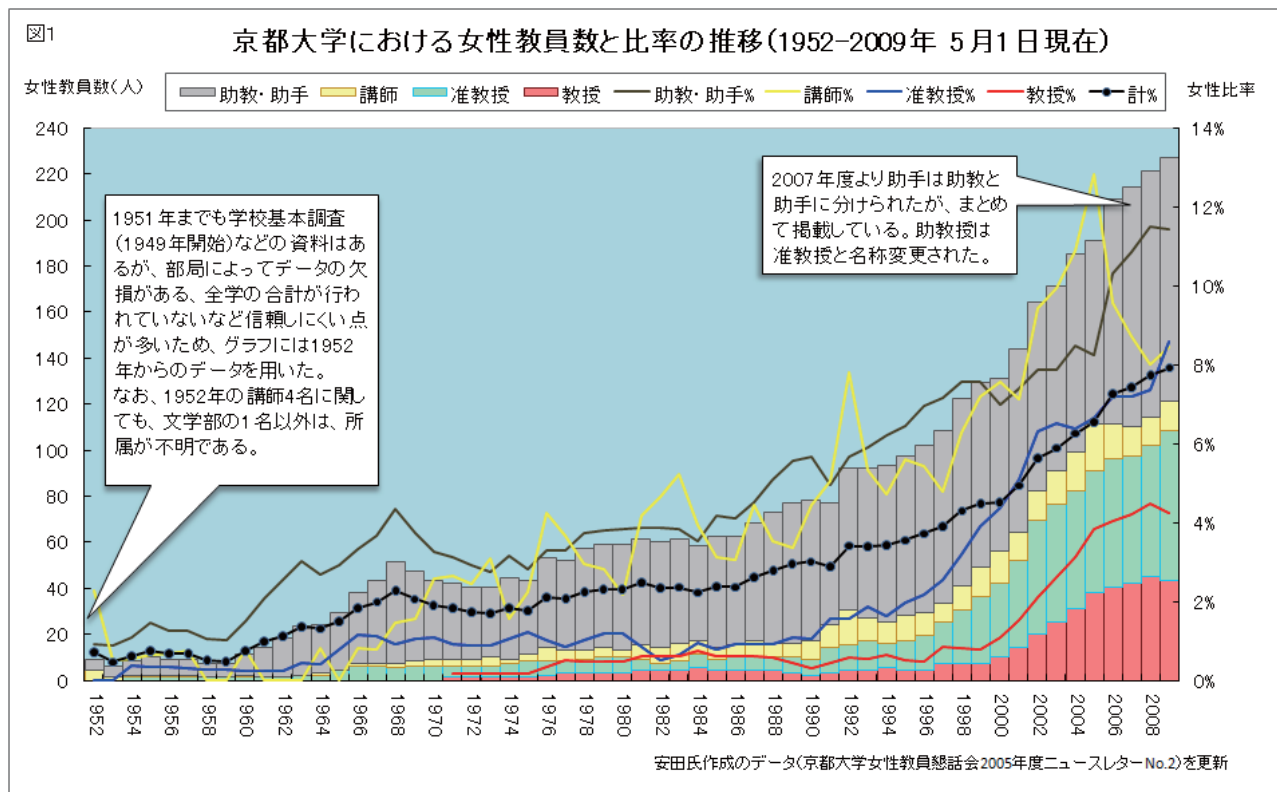
14時25分～14時35分 閉会の挨拶 (稲葉カヨ 女性研究者支援センター長)

※是非、ご出席ください。

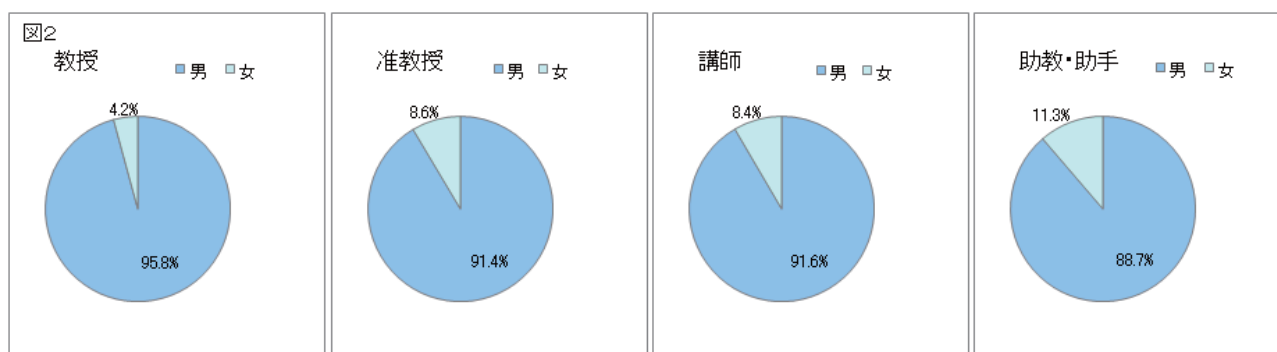
京都大学の女性研究者・女子学生の状況

1. 教員数の経年変化と職階毎の女性比率

2009年5月1日現在の京都大学の教員数（助手10名を含む）は、全体で2,865名である。そのうち女性教員は全体の7.9%、数にしてわずか227名である。2006年は7.3%だったので、この3年間で0.6%増加している。女性教員数が目立って増加の傾向を見せてきたのは、2000年頃からである。図1に1952年以来の女性教員の推移を示す。



職階別に男女比を見ると、女性は総数が少ないのでどのポストでもわずかだが、その中でも、教授ポストの女性比率が特に少なく、4.2%しかない。准教授ポストでは8.6%、助教は11.3%が女性である（図2）。

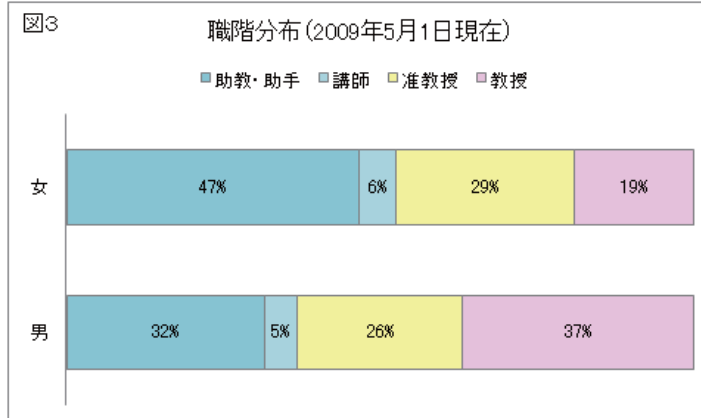


2. 男女別職階分布

図3の職階分布からわかるように、男性は教授、准教授+講師、助教の比がほぼ1:1:1であるが、女性は2:3:5であり、まだ女性の半数が助教である。

3. 様々な身分の女性研究者

大学には女性研究者が約580人いる。いわゆる“定員”の教員は230人程度(40.3%)、残り350人が種々のプロジェクトなどで雇用されている任期付きの研究者である。さらに任期付きの研究者は、“常勤(21.2%)”と“非常勤(38.5%)”に分かれる。



常勤とは、勤務形態は定員と同じだが、雇用形態が、例えば寄附口座准教授というように官職名に財源の由来が付いている任期付きのポストである。非常勤というのは、勤務形態が非常勤で雇用の財源はいろいろである。この中には、研究員や医員が含まれる。ポストと呼ばれて、学位をとっても定員のポストには就けないで、任期付きの研究員などのポストに就いている潜在的な女性研究者が、1.5 倍も存在しているわけである。

4. 女子学生の状況

2009 年 5 月 1 日現在の京都大学の学部生数、大学院生数、女性比率を表 1 と表 2 に示す。1946 年からの女子学生数とその比率は図 4 にある。

学部学生の女性比率は全体で 21.7%と、教員と比較するとかなり高い。医学部(4 年制)では、67%、文学部、教育学部、薬学部はほぼ半数が女子学生である。工学部は教員同様最低の女性比率 7.5%である。大学院では、修士課程から博士課程に進むに従って、女性比率が、21.4%から 27.1%へと高くなる。しかし、図 5 に示したように教員への道は狭いパイプになっている。

表1 学部学生数と女性比率

	学部生数計	女性%
総合人間学部	587	32.0
文学部	1,063	43.0
教育学部	323	44.0
法学部	1,621	24.1
経済学部	1,169	16.8
理学部	1,378	9.2
医学部(6 年制)	646	16.9
医学部(4 年制)	624	66.7
薬学部(6 年制)	122	55.7
薬学部(4 年制)	230	22.6
工学部	4,322	7.5
農学部	1,332	33.3
計	13,417 (139)	21.7

(注) ()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数。

表2 大学院生数と女性比率

	修士課程	女性%	博士課程	女性%
文学研究科	250	39.6	219	37.4
教育学研究科	98	51.0	120	60.8
法学研究科	30	26.7	78	38.5
経済学研究科	77	26.0	151	21.9
理学研究科	634	12.3	527	18.2
医学研究科			586	24.4
	141	53.2	92	50.0
薬学研究科	176	37.5	103	28.2
工学研究科	1,420	9.6	581	11.4
農学研究科	642	29.4	283	26.5
人間・環境学研究科	369	39.6	324	41.7
エネルギー科学研究科	227	5.7	88	15.9
アジア・アフリカ地域研究研究科			174	53.4
情報学研究科	376	6.9	158	12.0
生命科学研究科	167	32.3	143	29.4
地球環境学舎	95	48.4	56	0.0
計	4,702 (337)	21.4	3,683 (584)	27.1

(注1)医学研究科博士(後期)課程の上段は博士課程(4 年制)

(注2)アジア・アフリカ地域研究研究科は一貫制博士課程

(注3) ()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数。

図5 女性の比率の流れ

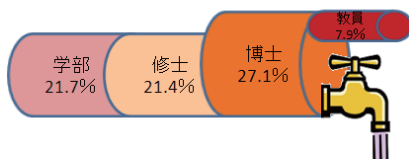
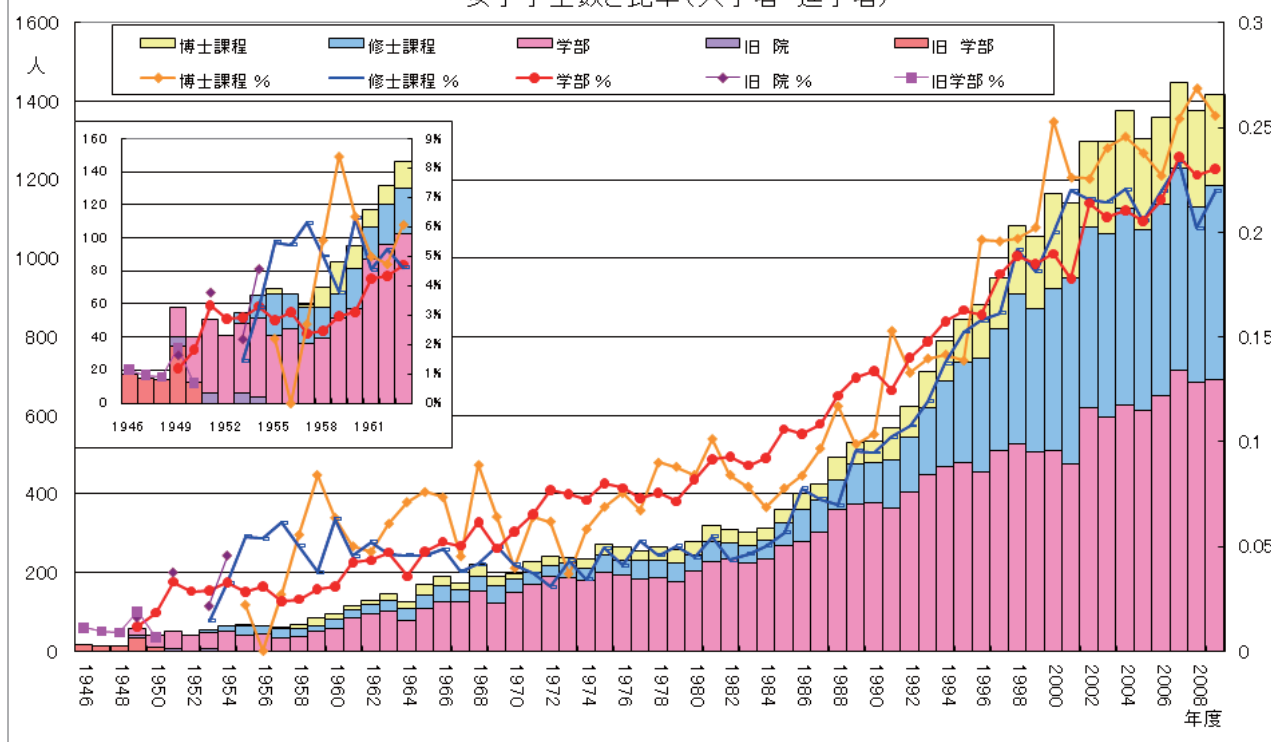


図4

女子学生数と比率(入学者・進学者)



連載：研究者になる！－第23回－

不安を乗り越えて

物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)・准教授
見学美根子

私の専門は神経発生学で、脳内で神経細胞がネットワークを作りあげる機構を解析しています。また、脳機能の柔軟性、個体の経験や学習に応じて回路が再編成される機構にも興味をもち取り組んでいます。

この連載が成り立つほど女性研究者はまだ希有なのだと思いますが、高校から大学までの私が描いていた未来像は、大学卒業後数年間会社で働き、20代後半に結婚し家庭をもつだろうという平凡なものでした。高校の頃は数学と物理が苦手で、能力的には文系の方が向いていたと思いますが、どうせなら好きな生物と化学を勉強しようと東大の理科2類から理学部生物学科に進学しました。しかし入ってみると理学部は大学院進学を前提としたプログラムで、専門2年間の実習と授業では如何にも中途半端な感じでした。そこで「もう少し」と修士課程進学を決めます。修士課程研究で、誰も知らないパズルのピースを探し出す、新しい発見をすることの面白さに目覚め、研究にのめり込みました。一つの小さな答えを出す、次の疑問が湧き、自分の進みたい研究の方向性も見えてきます。「もう少し、もう少し」の繰り返しで博士課程へ、ポスドクへと歩を進めました。

一方で研究を続けることにはずっと不安が付いて回りました。セクハラ等という言葉もなく、「女子の入門お断り」を掲げる研究室も多くあった時代です。ハードな研究生生活と女性としての結婚生活は両立が難しいけど覚悟はあるのかと教官に問われたこともありました。描いていた「平凡な幸せ」の青写真は遠のいて行きます。男性なら研究に打ち込んでも家庭を築けるけど、女性は何故それができないのだろう。研究は面白いけど、人生全てを研究に捧げる覚悟などあるわけもなく、人並みの幸せを望む両親に30近くなっても仕送りをしてもらわねばならない、自分のやっていることは正しいのか、自問する日々でした。

悩みすぎてどこか麻痺してしまったのか、とにかく海外に出たいと思い、博士課程終了後ただちにハーバード大学でポスドクを開始しました。そこで世界から集まった多くの優秀な女性研究者に出会います。アメリカは



個人主義と多様性を掲げたりベラルナ国である反面、個人の考え方は実はとても保守的で、女性やマイノリティーに根強い差別があると感じます。違うのは女性の側で、私のように周りの意見に神経質に怯えるので



なく、皆葛藤を抱えながらも自分らしい生き方を自信をもって模索していました。彼女達との出会いを通じて、私も腹が据わったように思います。「研究者になる！」と。研究スタイルもライフスタイルも、自分らしく一生懸命できればいいのではないかなと思える様になりました。

帰国して助手になり、研究室をもち、人よりかなり遅く家庭をもち、紆余曲折を経て今に至ります。研究と家庭の両立はできていると言いがたくジレンマにもがく日々ですが、欲張らせてもらって恵まれた人生だと感謝せずにいられません。自分の持っているものを少しでも人をプラスに動かす力に変えたいという思いです。

これまでお話しする機会のあった若手女性研究者の方々に、私が経験したのと同質の悩みを感じることがあります。普通と違う、変わった人生に踏み出すことへの不安。移動が多く不安定で先が見えない研究者生活。けれども順番や時期に囚われず、目の前にあるものにひとつずつ取り組んでいけば、それほど偏りのある人生にはなりません。(本当はどんな人でもそれぞれ偏っているはずです。)自分が待っている何かを得られなくなる不安で、本当のモチベーションとポテンシャルを封じ込めて踏みとどまるのではなく、一歩飛び出してそこで出会うものを掴む、そんな肉食系な女子であって欲しいと願っています。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>